

## 責任性の年代<sup>1</sup> (3)

ウィリアム・L. ヘンドリックス

(続き)

### 聖書の信仰に必要なこと

律法主義はたしかに、いつの時も常に、聖書の信仰を蝕む危険なものである。新約聖書のフェアサイ派はそのことの例証と言えよう。しかしながら、聖書の信仰にとって同様に危険なのは、信ずることが定かでなかったり、あるいはそれがそもそも欠如していたりすることである。実際、キリスト教を誕生させたそれらの決定的な仕業についてある最低限の確信や認識を持つことなしには、救いに至る信仰を十分な意味で抱くことは不可能であろう。信仰とは、信ずる対象に信頼することを意味する。クリスチャンにとって、それは神への信頼である。そして、その信仰には以下のことが含まれる。自身を心底、神に献げること、すなわち「心」である。その生き方を躊躇なく進んで、神の御心に沿うものにする、すなわち「手」である。そして、神はどのようなお方で、我々のために何をしてくださり、また我々に何を求めておられるのかを知ること、すなわち「頭」である。

新約聖書には、基本的かつ単純な使信が取められている（「ケリュグマ」と呼ばれる、告げ知らされた真理である）。これが最初に語られたのは聖霊が降り来たその時で、神が御自身についての啓示を完成させ、キリストの御業を称賛するものとなっている。そして、使徒言行録 2 章 14～36 節、3 章 12～26 節、4 章 8～12 節、5 章 30～32 節、10 章 36～43 節に、萌芽的なものながら、残りの新約聖書全体が明かす事柄が書き留められてもいる。

初期の教会が伝える使信の基本的要点とは すなわち、次のとおりである。(1) イエスは神の御許から、天地を創られたイスラエルの神の御許から来られた。(2) そのキリストを、人々は殺した。この理解は後に拡大され、すべての人々が、すなわち人間が一つの全体として、その罪性においてキリストの死に責任を負っていると明言するところとなる。(3) しかしながら、キリストの死は神の御計画によっていた。つまり、神はキリストの死を通し、人間を自らのもとに連れ戻そうと、事をなしておられたのだった。そして (4) そのキリストが死から引き上げられるのである。神はこうして、キリストにおいて、人間最後の敵 死さえも征服された。(5) 以来、神はキリストを通して聖霊を送り、御自身がキリストにあって人間のために何をなしたか、それを証言して下さっているのである。

これらの事実を抜きにしては、キリスト教の信仰は不明瞭な捉えにくいものとなる。しかも、これらの単純な事実の内に、誰も完全には説明し切れずにいる深遠なものが横たわっている。この基本的なキリストの福音が発展させられてきたのである。新約聖書そのものからして、事実以上の解釈が

そこでなされているのが分かる。つまり、筆者が思うに、使徒言行録の初めの数章に要約されている使信 (ケリュグマ) は減じてならない、ということである。換言すれば、それこそがキリスト教の福音の中核だからである。それゆえ、キリスト教のこの基本的使信が人間にとっていかなることを意味するのか、そのことについて、人はすべての者が、したがって子どもたちもまた、ある程度の意識を持たねばならないと言えよう。

そのうえで、救いということ論じるにあたっては、人には、こうした事実について聞き それらを是認することに加え、あと一つ せねばならないことがある。すなわち、信じねばならない、ということである。事を引き起こしてくださった その神への信仰である。そして、神へのこの信仰に付随するのが、自身をはじめとすると被造物全体の絶望的な思いである。この絶望感が悔い改めとなって吐露される。そこには、罪を悲しむ思いが伴う。それは自らに信を置いたことを悔いる悲しみであり、信頼に足るただ一人のお方、神を拒んだことを悔いる悲しみである。そのようにして、あれもこれもと、自分自身の欲得からそれらを得ようとしたことを悲しむ思いである。冒頭で罪の三要素についてその定義を述べたが、罪の悔い改めに関するこうした理解を それと突き合わせて見ていただきたい。

こう言うと、ならば、こうした事柄を理解し、信じ、そして受け入れることが子どもに可能かどうか、と問われるにちがいない。それはもちろん、一様には言えない。その子、その子による。その子の一般的能力や年齢によるし、考えを把握して決断する その力にもよる。上記のような考え方をどんな言葉で表現するか、またそれを明確にするためにどんな例話を用いるか、にもよる。その子が育てられている家族によるし、両親がその子の教育にあたって どれだけ宗教的事柄に関心を寄せているか、にもよる。たしかに、10 歳の子どもが 20 歳・30 歳になってからと同じような仕方で神の御業を理解し、それを概念化するかといったら？ 答えは、ノーであろう。また、子どもがキリスト教の福音理解を言い表わすのに、<sup>おとな</sup>大人の言い回しや体験談でそうできるかといったら？ それもまた、答えはノーである。

さらに、探らねばならない問題はまだある。すなわち、神との関わり方には もしかすると、2 つのあり方があるのではないか、ということである。子どもたちのそれと、大人たちのそれである。しかしながら、我々はここで、〔二重基準を設けるようなこうした考え方には〕明確にノーと言わなければならない。例えば、古代の異端「グノーシス主義 (gnosticism)」は、救いには〔大まかに言って〕2 種類の形態があると教えた。つまり、聖なる知識 (<sup>グノーシス</sup>gnosis)<sup>9</sup> を与えられた者たちのそれと、一般の人々のそれである。実際、学問ある者たちはいつの時も、信すべき事柄を過度に要求する誘惑に駆られる。

しかしまた、これと逆のものも同様に間違いと言わざるをえない。信心深い人々が口にする「救われるために信ぜねばならないというようなことは、何もない」という勧めである。神に信頼せよ、それで充分！ というのである。けれども、そこで言う「信頼」とはどんなことなのか。「神」とはどんなお方なのか。そして、人が自分に信頼するようにと、その神御自身は「何」をされたのか。このように、「神に信頼する」とか「イエスを愛する」とかいった単純な表現でさえ、そこにはそれなりの

理解が含まれているのである。たしかに、キリスト教の前提として、神がその聖霊によって助けてくださるのでなければ、人は誰もキリスト教信仰を「理解すること」はできないと言えよう。がしかし、神が人と関わる時、その仕方として、人の能力を踏まえてこれを助けられるのもまた事実である。

それゆえ、神は何を求めておられるのか、事はいま一度、そこに戻ることになる。神が求めておられるのは すなわち、福音を告げ知らせることであり、人がこれを受け入れることである。信頼という事を 神がその当人に可能とされるいかなる人も、である。この求めは、子どもたちにも減じられることはない。そこには、ただ一つの本質的福音があるだけだからである。したがって、責任性の年代というのは、福音の基本的真理を把握して受け入れる その力と関連づけて論ぜられなければならない。

### 聖書が子どもたちについて語る場所

子どもたちは〔架空の生きものでなく〕現実の存在である。〔<sup>まが</sup>紛いもない〕人間である、たとえ小ぶりのそれであったとしても。であれば、神に至る道が一つしかないとしたら、子どもたちもまた、キリストの使信を介して そこへと赴くことになる。そう考えて、聖書が子どもたちについて語る場所を厳密に見てみると、そこで<sup>みいだ</sup>見出す事実<sup>に</sup>に教えられ、また少しく驚かされもする。つまり、聖書が子どもたちに言及するとき、そのほとんどがある特定の子どもについて それを描写的に記す〔にとどまっている〕、ということである。〔旧約聖書では〕子ども時代のモーセやイシュマエルへの、また 生まれて間もなくして死んだダビデの子やサムエルへの言及が見られる。一方、子どもたちは福音書にも登場する。名前は総じて記されていないが、イエスはそこで 何事かを教えようとして、またイエス自身の思いやりを例話的に説明しようとして、子どもたちに目を<sup>と</sup>留めるよう促している。その他、子どもたちの訓練について、一般的な教えが幾つか、旧約聖書の知恵文学に記されている。なお、少年イエスの記述は聖書にありはするものの、多くはない。

子どもたちに関する 聖書のこうした言及を見るとき、その一つの解釈として、次のような結論が明らかになろう。すなわち、聖書における重要な人物たちの幼少期がそこに書き留められている、ということ。教えと手本による 子どもたちの教育が命じられている、ということ。年若い者たちへの大きな思いやりが聖書の文書で表明されている、ということ。そして、子どもたちをめぐる聖書の叙述は 全体として、神学的というよりはむしろ描写的である、ということである。

### 問わねばならない諸問題

以上のようなより大枠の問いに照らして考えるとき、南部バプテストで行なわれている事柄には、より充分な調査検討を行なって 注意深く評価する必要のあるものが少なくないと言えよう。バプテストは歴史的に、信仰者にバプテスマを施し、新生者をもって教会員とすることを主張してきた。〔バプテストのこの中心的特質に触れる状況として、例えば〕バプテストは今日、<sup>こんにち</sup>前世紀末前後の

先達たちに比べて どうやら、子どもたちのニーズや能力により強い関心を抱いているように見える。<sup>10</sup> それは、子どもにバプテスマを授ける年齢を、南部バプテストが確実に低下させていることから分かる。

1966年の時点で、南部バプテストの諸教会で5歳以下でバプテスマを受けた子どもたちの数は1,146人に上っている。さらに、南部バプテストは同年、6～8歳の子どもたち34,026人にバプテスマを行ない、同じく9～12歳の子どもたち139,211人に、また13～16歳の子どもたち59,569人にバプテスマを施している。（以上、*The Quarterly Review*, Oct., 1967より）しかしながら、ここで問われねばならないのは、「信仰者のバプテスマ」というバプテストの歴史的原則と我々南部バプテストのこうした「バプテスマ受浸者の急激な低年齢化」との間に はたして、矛盾を孕んだ深刻な緊張がありはしないのか、ということである。しかも、これまでの議論に目を向けるとき、事をさらに明らかにするためになすべき問いがこれ以外にもある。

一つには、実際に備わったその信じる力以上に 神に対する責任を子どもたちに負わせようとしてはいないかということであり、また 生涯を懸けるような決断が年齢的に想定可能と思われるその年代以前に 彼らに同様の責任を問おうとしてはいないか、という問題である。たしかに、多くの人々が推測するように、キリスト教信仰を語る際に大人が用いる宗教的表現や専門用語が子どもたちにも意味のないものでないのは全くそのとおりであろう。けれども、小さな子どもにとって、例えば和解とか贖いとか、また悔い改めとか、さらに言えば信仰という言葉でさえ、それらを理解するのはそうそう容易でないと見えよう。事実、こうした用語を十二分に理解することは、大人たちでもとうてい及ばないことが少なくない。したがって、行き届いた説明と明確な例話を示し、子どもたちが「信仰用語」を把握できるよう助けなければならない。

加えて、次のような問いもなされてしかるべきであろう。何につけても重大かつ永続的な決断をすることに慣れていない子どもたちに、生涯を懸けて神に従うというような決断がはたしてできるのか、という問いである。実のところ、小さく幼い子どもたちについて我々が抱く神学的懸念というのは、彼らに対する我々自身の心配を投影したものであることが多い。しかしながら、聖書的に見て、子どもたちが深いところで自ら意味ある決断をしようようになるまで、神の思いやりと慈しみに信頼し、それらが彼らに及ぶことを信じていけない理由はどこにもない。実際、キリストにおいて現わされた神と人類との間の恵みの契約に目を留めるとき、若く小さな者たちは神によって 思いやりに満ちるその顧みの内に守られてある、と見るに十分な根拠がそこに認められもする。

さらには、〔前述のような〕聖書の時代以降に生じた諸事の様相が この他にも、重要な問題を我々に提起する。すなわち、自分がなぜ良くないと思われているのか、それを本人が理解できないうちからその子を厳しく非難したり拒絶したりして、子どもの罪責感を強めてはいないか、ということである。両親は往々にして、自らの文化的・社会的願望や価値観を神の御心と同一視し、重大な過ちを犯してしまう。がしかし、そのようにして、かくかくしかじかこんなことをすると 神様は愛してくれないよ、などと子どもたちに言うのは、事の扱い方としても良くなければ、神学的にも適切なものではない。そもそも、福音の真髄とは、神が罪人を愛してくださるということではないのか。他方、

我々は神について矛盾した見方を示し、その理解を混乱させてあやふやなままにしてしまうことも少なくない。例えば、子どもたちに対し 神の優しさと愛についてしか教えない人もいるが、これも望ましいとは言いがたい。というのも、その子たちが少しばかり大きくなると、神が途端に、憤然として怒れるお方として描かれたりするからである。これはなんとも困惑させられる変化で、それが時間にしてわずか一週間のうちに、すなわち〔新学年に〕進級したその週に起こるのである。つまり、我々の教会に求められているのは、すべての年齢段階において、正確かつ偏りのない仕方で神について語り示す、ということである。

要するに、信仰に最低限必要と思われる事柄がすなわち 福音が基本的に求めるところでもあるとしたら、キリスト・イエスへの信仰を表明する人々がそれらについて承知しているということ、それを我々が確かなものになっているか、ということであろう。〔信仰による〕新生者は誰もが何らかの仕方で、それらについて表明できなければならない。そして、それを意味あるあり方で、以下のような諸概念と関連づけて行なえなければならない。それらの諸概念とはすなわち、イエスとはどんなお方で、そのイエスが我々のために何をしてくださったのかということであり、また イエスの死は人間のためのものであって、その復活がこれに続いたということ、さらには 神の聖霊が御子イエスの働きを栄誉あるものとし、それを通して人々を御自身の御許に導いておられる、ということである。

〔繰り返しになるが〕子どもたちを思うその思いの丈から、救いに二通りのあり方を設けることがはたして良しとされるのか、我々は自問しなければならない。大人用のそれと子ども用のそれである。そうすることで、我々は救いを安価なものとし、その結果、子どもたちは変化もしなければ、悩み多き青年期に支えられることもないといったことになりはしないか、と思うからである。

こうした諸問題や同様の懸念に、南部バプテストは皆、目を向けなければならない。聖書の信仰が求めるところを見、同時に、各地の教会に行かなくなった教会員<sup>11</sup>の割合が増加していることを知るにつけ、そう思わされる。

### 試案としての指針 数項目

(続く)

### 訳注

1. 原文の英語表記は "The Age of Accountability" で、今風な表現で直訳すれば「説明責任の年代」とでもなるろうか。"accountability" とはそもそも "accountable" という語から来た言葉（名詞形）で、"accountable" の意味合いについては、OED (*Oxford English Dictionary*) が "liable to be called to account, or to answer for responsibilities and conduct" "responsible" と、また OAD (*Oxford American Dictionary*) も "required or expected to justify actions or decisions" "responsible" と、その解説を記している。つまり、<sup>みづか</sup>自らの責務や行為、決断について しかるべき

説明をなし、それを妥当なものとして弁明することが求められ、期待されているということ。それが "accountable" の基本的意味合いであり、"accountability" はこれを名詞化したものとなる。

本訳稿では、こうした含意を押さえつつ、と同時に 表現を分かりやすくするため、タイトルを「責任性の年代」と訳出することにしたい。

2. [ ] 書きは、説明追加のための訳者の挿入。以下、同様。
3. 上記「訳注 1」を参照。
4. 本小論は Clifford Ingle, ed., *Children and Conversion*, Broadman Press, 1970 に、その第 6 章として所収されている。
5. 新共同訳では、「神にかたどって・・・」。
6. 「3:16~18」の誤植か？
7. 上記「訳注 4」を参照。
8. 古代ギリシアの哲学者 プロタゴラスの言葉、「人間は万物の尺度である」を援用して表現したものの。
9. 「靈知」とか「覚知」と訳される。
10. 本書が刊行されたのは 1970 年であり、その時点から見て「前世紀末前後の先達たちに比べて」ということ。すなわち、20 世紀後半の時点で、19 世紀末から 20 世紀初めの先達たちと比較していることになる。
11. いわゆる「他行会員」<sup>たぎょう</sup> 「長欠会員」等。

(矢野 眞実訳)